

I C T新事業創出推進会議（第1回）議事概要

1. 日時

平成25年12月25日（水）13時00分～15時00分

2. 場所

総務省8階第1特別会議室

3. 出席者

（1）構成員（敬称略）

三友座長、谷川座長代理、岩浪構成員、岡田構成員、木谷構成員、久保田構成員、越塚構成員、篠原構成員、島田構成員、清水構成員、関構成員、高橋構成員、千葉構成員、富田構成員、野村構成員、林構成員、松本構成員、宮部構成員、森川構成員、安本構成員

（以上20名）

（2）総務省等

上川総務副大臣、藤川総務大臣政務官、桜井総務審議官、阪本情報通信国際戦略局長、吉田政策統括官、鈴木官房総括審議官、武井官房総括審議官、南官房審議官、渡辺官房審議官、小笠原情報流通振興課長、大橋情報通信政策課長、田原技術政策課長、鈴木衛星・地域放送課長、内閣官房・I T総合戦略室市川参事官

4. 議題

（1）I C T新事業創出推進会議の開催について

（2）今後の検討課題

5. 議事概要

冒頭、上川副大臣、藤川政務官、三友座長、谷川座長代理よりそれぞれ挨拶があった。

主な内容は以下の通り。

【上川総務副大臣】

○ 我が国の市場規模にしめるI C T産業の比率は全産業中最大規模。これまでI C Tが

十分に活用されていなかった分野においても I C T の活用をできるだけ推進していくことにより、新たな付加価値、事業を生み出すことが可能となる。

- 7年後のオリンピック東京開催という絶好の機会を生かしきるためにもイノベーションを起こす人をいかに輩出しいかに育成するか、その仕組みづくりに向けて全力を挙げて取り組んでいくことが必要である。

【藤川総務大臣政務官】

- 2020年に向けてこれからの7年間という期間は、我が国にとって試練の大きな本場に大切な時期であると同時に、大きなチャンスをつかむ重要な時期であると考えている。
- この5年で7.1%から4.3%に I C T に関する輸出額シェアが減少しているが、我が国の強みはやはり物づくりであり匠の技であることは間違いない。

【三友座長】

- 将来に向けて、特にオリンピックに向けてわくわくするような取り組みができないかと思っている。

【谷川座長代理】

- 日本で議論していくと欠けている視点としてはアーキテクチャーという考え方ではないかと思う。資料1-12は、今ドイツで動き出している INDUSTRIE4.0 という製造業を支えていくための ICT 活用のアーキテクチャーとその全体計画である。このようにもっと大きな枠組み、アーキテクチャーをきちんと考える。その中に個々の要素が入ってくるということが、こういった新領域を考える中で重要ではないか。このような議論が数回にわたって問題提起されつつ形ができたらと考えている。

(1) 開催要綱及び議事の公開について

事務局より資料1-1に基づき説明が行われ、開催要綱(案)が了承された。

(2) 今後の進め方について

事務局より、資料1-2に基づいて今後の進め方について説明がされた。

(3) 構成員からのプレゼンテーション

森川構成員、越塚構成員より資料1-3、1-4に基づき説明が行われた。

(4) フリーディスカッション

構成員から会議における期待、抱負について発言があった。主な意見は以下の通り。

【森川構成員】

- 色々なステークホルダーが有機的に連携して、オープンイノベーションのような形につなげていく仕組みが必要。

【安本構成員】

- プラットホームを構築している外資系の Amazon (アマゾン)、Apple (アップル)、Google (グーグル) などとどうやって相対していくか、日本としてコモディティ化していないサービスをやっていくかが重要。

【宮部構成員】

- 重厚長大な仕組みでなくても、インフラさえ準備しておけば非常に少人数でイノベーションが起こせるのが ICT の特徴。そういうトライアルがたくさん起きるような場の提供が重要。

【林構成員】

- 店舗展開に加え、ネットワークに乗せた小売業など、いわゆるオムニチャネルリテリングの取組が必要となってきた。

【富田構成員】

- M2M や IoT など色々な試みがなされているが、まだ世界でもビジネスモデルがうまく育っていない。データ収集をする側とそれを分析して見える化して社会へ還元していく側とがうまくつながるビジネスモデルを作っていくことが重要。

【高橋構成員】

- M2Mについて、通信技術の高度化を初めセンサー技術の高度化、あるいはコモディティ化が進む中で差別化用品としてのウェアラブルデバイス、このようなものをいかに融合して新しいイノベティブなサービスをつくっていくかということが非常に重要。

【清水構成員】

- 2020年には東京が世界最先端の都市の典型でなければいけない。膨大な観光客や報道関係者が皆最新のスマートデバイスを持ってどっと押し寄せる。スマートデバイスなり4K8Kがオンラインでつながる、ワイヤレスでつながる、それが快適に実現できるような情報通信基盤をいかに実現していくか。

【篠原構成員】

- 数十年前のスーパーコンピューターと今のスマホのCPUの処理能力はほぼ同じ。ICTの技術は大きく進歩した。それに比べてライフスタイルは技術の進化ほど大きくは変わっていない。技術の延長線上で将来を考えるのではなく、技術はあくまでも利用するものなので、実現すべきビジネススタイル、ライフスタイルにどう技術を活用するかという観点で議論したい。

【久保田構成員】

- スーパーハイビジョン(8K)は、非常に幅広い要素技術を統合して実現されるもの。単に放送や映像ビジネスに限定されることのない幅広い応用可能性を持っている。ロンドンオリンピックのときのようなパブリックビューイングを東京オリンピックでも実施できるよう準備に着手。

【岡田構成員】

- 東京オリンピック、パラリンピックでは、海外から多くのお客さんも来るので、具体的にICTを活用してどのように世界にアピールしていくのかということ、こういった会議の中で議論していきたいと思う。

【岩浪構成員】

- 今年世界の携帯電話契約は70億を超える。最新のスマホは3～4年前のデスクトップPCと同程度の性能。数年前のサーバーマシンと同等スペックの端末を全世界のユーザーが持ち歩く時代なのだから、ビジネスも社会ルールも変わって当然。

【木谷構成員】

- ICTの共通基盤の構築についての議論が重要。共通基盤は認証系やセキュリティー系、ビッグデータの処理なども含む。オープンデータも重要。

【越塚構成員】

- 教育が非常に大事。人材供給という意味で人材育成としての教育もあるが、最近では教育自身がICT産業の1つにもなりつつある。MOOC（ムーク）と言われるようなマッシュアップオンラインのものも出てきている。

【島田構成員】

- ICTがあらゆる産業の基盤になる、活用されて役に立っていくという話があったが、ICTの中でも映像の高度化が同様にさまざまな産業に役立つのではないかと感じている。

【関構成員】

- 4K8Kに関しては、来年の4Kの実験放送を目指してコンテンツの試作に取り組んでいる。放送以外のいろいろな分野での利活用の可能性を検討しており、医療・教育分野なども適しているのではないかと感じている。

【千葉構成員】

- 2020年に向けてサービストレンドに軸足を置いて、どういったサービスをICTで行うと国民の幸せ感が得られるかという検討が大事。その上で今後2020年に向けての7年間のトレンドを、過去の7年間の振り返りとともに分析することが必要。

【野村構成員】

- 1つのターゲットとして2020年が設定されているので、それに向けて何をすべき

か、どんな課題を解決すべきかという優先順位づけが非常に重要になってくると思う。東京オリンピックのショーケースの1つとして、新しいとんがったアイデアやデジタルネイティブの発掘についても考えていけたらよいのではないか。

【松本構成員】

- ケーブルテレビの持ち味である地域力、ネットワークと顧客基盤を生かして、ネットを通じた様々な課金サービスの代行決済や、医療、教育、防災などの公共アプリケーションの提供を検討。

【谷川座長代理】

- 業界横断、省庁横断でどう動くべきか、大きな枠組みでアーキテクチャーを考えるべきであり、簡単に言うと、大きなシナリオで皆が乗って行けるものというのが一つの考え方かと思う。例えば、オリンピックへの対応を特区として、制度を変えてみることも議論の視点となるのではないか。

【三友座長】

- 新事業の創出ということだが、まずオリンピックが1つのターゲットになるだろう。ただしオリンピックというのは目標ではなくてある意味ではステップストーンと言うのか、踏み台になるようなものでなければいけない。それをテコにして日本がさらなる高みに行くような形にならないといけない。